

歴史と民俗40

神奈川大学日本常民文化研究所論集 40

2023年7月19日発行
神奈川大学日本常民文化研究所編
発行所 株式会社平凡社

[要旨集]

■特集 それぞれの資料と方法

石造物研究の方法

——民俗学と考古学

角南聡一郎

【要旨】

石造物という対象について、民俗学と考古学ではどのようなアプローチをおこなってきたのか、それに何を見出そうとしてきたのだろうか。この問題について、研究のあゆみを振り返りながら考察を試みた。検討の結果、石造物研究の流れは二つある。山中共古から鳥居龍蔵の影響も受けつつ生成された考古学色の強い流れは、三輪善之助と服部清道へと引き継がれた。他方、民俗学色の強い系統は、山中から武田久吉へ、そして中沢厚へと受容されていったと考えられる。三輪や服部のように石造物の物質的側面だけでなく、信仰に関する問題も併せて調査するということが、近世以降の資料については肝要であろう。これは物質を調査しながら、民俗調査も実施することを意味しており、石造物という物質文化を歴史民俗資料として調査研究していくこととなる。民俗学的方法と考古学的方法の関係は、表面的な問題をなぞるだけでなく、方法論の成立、普及、定着の検討が必要ではなかろうか。

常民研における資料筆写・出版の思想

——『資料筆写のしおり』を中心に

関口博巨

【要旨】

財団法人日本常民文化研究所・水産庁資料整備委員会編『資料筆写のしおり』（一九五一年刊行）という小冊子がある。この小冊子は、戦後の「月島分室」における漁業制度資料調査保存事業の筆写要項、あるいは財団常民研が編んだ『奥能登時国家文書』『備中真鍋島の史料』などの資料集（史料集）の編成方針の根拠となったもので、分室を率いた宇野脩平、アチックミュージアム以来の古文書の読み手藤木喜久馬、彼らの指導を受けた分室の若手研究者たちが練り上げたものであった。『しおり』と何冊かの資料集の背景には、戦前の『豆州内浦漁民史料』以来の「論文を書くのではない。資料を学界に提供するのである」という渋沢敬三の思想があった。アチックから財団常民研へと引き継がれた資料筆写ならびに資料集刊行をめぐる思想の継承は、神奈川大学日本常民文化研究所はもとより、学界全体で考えるべき課題である。

「東アジア民俗学」のための資料論

周 星

【要旨】

民俗資料を調査・収集・蓄積する伝統を踏まえた日本民俗学は資料論を強調する特徴がある。日本民俗学の資料論は一国内でよく議論されてきたが、一国民俗学の延長線上にある比較民俗学では、民俗資料に関する議題がほとんど取り上げられなかった。比較民俗学は新たな視野として一国民俗学の閉塞感を打開したが、便宜的に自国の民俗資料をメインに、比較対象国の民俗資料を断片的に取り入れる形に留まったのが一般的な状況である。日本・中国・韓国の比較民俗学は、ともに自国の民俗を中心に展開されているが、相互に向き合うと、「東アジア民俗学」の可能性が現れる。それぞれの国語や文字言語の壁を乗り越える必要性のある「東アジア民俗学」が果たして成り立てるかは、ある意味では、通じ合う資料論を含む民俗学の方法論に依拠すると思われるが、真剣な議論はまだ始まっていない。「東アジア民俗学」にとって、関係諸国の比較民俗学者が共同でフィールドワークを実施し、ともに民俗資料を発見・生産することが今後の課題である。

デザインから読み解く社会

角山朋子

【要旨】

本稿は、デザイン史研究の資料と方法に関する試論である。多くのデザイン史研究者の関心は、デザインがモノ・人・環境との間に形成する関係性に向けられる。デザイン史は一九七〇年代イギリスで成立し、デザインの政治的、経済的、社会的意義を検討する学問として発展した。筆者の場合、ウィーンの「ウィーン工房」の歴史的輪郭をオーストリアの近代化問題と絡めて検証する上で、研究方法として、一次資料レベルでの実証的研究と、運動を特徴づけた文化的・歴史的要素の分析を軸とした。資料には、作品と各種文献資料を用いた。『ウィーン工房作業綱領』（一九〇五）の分析からは、工房設立に至るイギリスからの思想的影響とともに、世紀転換期ウィーン独自の文化的文脈が浮かび上がる。

本稿を通じて明らかになるのは、文化資源としてのデザインの価値であり、今後はデザイン史という領域自体が、社会との相互的關係の中で成熟していくべきではないだろうか。

写真映像資料とコミュニティ

——デジタルアーカイブ化の先行事例から

高城 玲

【要旨】

本稿は、日本の人文学のなかでも特に民俗学・人類学の関連分野における写真映像資料に主たる焦点をあて、写真映像を使った近年の新しい取り組み、即ち、デジタルアーカイブ化の先行事例を紹介し、そこに切りひらかれる新たな可能性について考える。まず主に二〇世紀の日本の人文学における写真映像資料の位置づけを簡単に概観する。その上で、デジタル化を受けた特に二〇〇〇年代以降の日本の民俗学・人類学の関連分野における新たな取り組みの事例として、(1) 日本常民文化研究所のアチック写真・フィルム、(2) 国立民族学博物館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトと DiPLAS、(3) 新潟大学のいがた地域映像アーカイブデータベース、(4) せんだいメディアテークのコミュニティ・アーカイブの四つの事例を取りあげる。ここでは、写真映像資料が、多様な人々によるコミュニティでの共有、参加と協働、相互双方向的に語り解釈しあって身体的情動的にも共振するといったプロセスを生みだしえるという可能性、さらに、未来に向かってコミュニティを組み上げ直すという新たな可能性にもひらかれた存在と成っていくことが示される。

儀礼における資料と方法試論

——ミエン・ヤオ研究を事例として

廣田律子

【要旨】

二〇〇四年湖南省新寧県の「跳鼓壇」儀礼を皮切りに二〇一九年まで、中国・タイ・ベトナムのミエン・ヤオが実施する種々な儀礼を多分野の研究者が協力して調査してきた。

極めて複雑なミエン・ヤオの儀礼システムの解明には、多分野からのアプローチが不可欠であり、多角的分析成果をもち寄り有機的に結合させることで研究を進めることが最善の法と考えている。

さらにミエン・ヤオを取り巻く周辺の漢族の伝承する道教・法教との比較は不可欠である。道教・法教に関する文献学の長年にわたり蓄積された成果を導入することで、ミエン・ヤオの独自性を明確にすることに繋がるといえよう。さらに宗教史の上にミエン・ヤオの儀礼を位置づけることで、ミエン・ヤオの儀礼の成立における諸宗教との交流関係も明らかにする必要もあると考える。

種々な学問分野からのアプローチによってはじめて複雑なミエン・ヤオの儀礼知識の総体が立体的に把握でき、周辺に居住する諸族の伝承する宗教儀礼との比較により相互の影響関係と成立や発展の変遷が解明される。

「語り」が語る過去

堀 充宏

【要旨】

民俗学が伝統的に採用してきた「聞き書き」という調査方法は、文書記録に残りにくい事実を確認するために行われてきた。しかし「人から話を聞く」ということは単に事実関係の確認だけが目的ではない。話者が語るその「語り」の力は、文書記録とは違った過去を導き出すことがある。これまでライフヒストリーと呼ばれる手法で話者の人生をフィールドとした民俗の推移を解き明かすことがたびたび試みられてきた。しかし民俗学におけるライフヒストリーの要件や資料としての位置付けについての議論は停滞していると言わざるを得ず、まず実践事例の集積が必要と考える。今回、都市近郊農村に生きた女性の「語り」を通じて、事実関係の確認以外に知ることのできる過去を提示する試みをしてみたい。

話者は東京近郊の農村で暮らしてきた女性である。近郊農村における女性の役割、それに対する話者自身の評価を通じて、この地域の地域性を考えていきたい。

歴史資料としての図版と写真、イラスト

——首里城大龍柱の向き「改ざん」問題を事例に

後田多敦

【要旨】

本稿では、琉球国末期の王城国殿（首里城正殿）の大龍柱という象徴的な造形物の事例で、図版や写真、イラストが本来の形状をどの程度再現しているのか、などを検討した。大龍柱の向きは見解の対立があり、「復元」も左右している。ここでは、図版、写真、イラストとそれを基にした「復元」という二つの論点から考えた。仏人ルヴェルトガは一八七七年に琉球を訪問し王城国殿を写真撮影している。これが最古の国殿写真で近年確認された。ルヴェルトガは琉球での見聞を「琉球諸島紀行」として一八八二年に発表している。写真確認以前から、「琉球諸島紀行」図版で正面向き大龍柱の姿が知られていた。しかし、一九九二年の首里城「復元」では、王府記録のイラストを根拠に相対に設置された。二〇一九年の正殿焼失後の再建でも相対向きの方針だ。本稿では大龍柱本来の向きは正面であることを再確認し、また、歴史事実確定の問題と「復元」の在り方についても触れている。